

唐代の譯場に參したる

唯一の日本僧

妻 木 直 良

(靈仙三藏の事蹟)

- 一 漢譯佛典と日本人——二 唐代の佛教と翻譯家——
- 三 靈仙大德譯經の史料現出——四 靈仙三藏の事蹟——
- 五 「貞元釋教錄」に於ける一疑問

一 漢譯佛典と日本人

漢譯佛典の一大叢書たる大藏經の卷數は、唐代開元十八年(A.D.730)智昇法師の撰定せる『開元釋教錄』に、見在入藏の者として一千七十六部、五千四十八卷と決定せられしより、一切藏經の數とし云へば、五千四十八卷の事と云習はせられしが、其の以後に翻譯せられしものを加ふるときは、唐代の一百

二十七部、二百四十二卷、及び宋より元の至元二十二年(A.D.1288)に至る二百四十部六百四十七卷、『至元法寶錄』に依る(合せて八百八十九卷を増加するに至るべし。たとひ『開元錄』には支那撰述の四十部三百六十八卷を編入するゆへ、此を削減して通計するも、壹千四百單參部、五千八百六十九卷を得べし。

是の如く多數の佛典が、漢譯せられ居るに拘らず其の翻譯者は悉く印度、西域、支那の高僧に局られて極東の日本僧は何等手を下すこと無しとせば、たとひ今日にては、眞正の佛教を維持するもの日本國に在りとせんも、往時を顧みて聊か忸怩たる情無しとせず。然れども幸に我が靈仙三藏ありて、唐代の凋落せし譯經道場に參し、有名なる般若三藏(Prasāngīka)を助けて、

大乘本生心地觀經 一部八卷

の漢譯を成功せしめたるありて、大に日本人の肩身

廣きを感じしむ、以下聊か是の事實を闡明して隠れたる日本高僧の英魂を吊せん哉。

二 唐代の佛教と翻譯家

想ふに支那佛教の盛んなるは、唐代を以て最とすべく、譯經と云ひ、著述と云ひ、後代に光被し、三韓日本の域外まで感化を及ぼせしこと、唐代より盛んなるは無かるべし。而も譯經事業に就て之を云へば、唐代貳百九十年の間、其の前半を以て最盛時と云ふべく、其の後半、即ち代宗(A.D.763-769)以下は凋落時代といふべく、僅かに不空三藏ありて其事業を繼續せるあるのみ。不空三藏の没後は、全く翻譯の闇黒時代にて、『至元錄』等には、唐の貞元五年(A.D.789)より床太宗太平興國七年(A.D.982)に至る迄、凡そ一百九十三年間は、竝に譯人なしと放言するに至れり。若し嚴密に云ふ時は、元和年間(A.D.811頃)に般若三藏の譯經あり、大中年間(A.D.850

頃)に智慧輪三藏(般若衍迦 Paganakara)の譯經ありしゆへ、全く其の迹を絶ちしは、智慧輪三藏以後と云ふべし。然れども皇帝の敕命に依り、國家の事業として翻譯道場を開きしは、般若三藏の譯經事業を以て唐代の結末とすべく、譯經事業以外の高僧もまた是の以後に於ては其迹を絶ち、唐代の佛教は武宗の排毀を加ふること無きも、尙ほ衰殘に近づきつゝありしなり。之に反して日本の佛教は、傳教、弘法の二人を始め、所謂入唐八家なるもの、すべて是の凋落に傾きつゝある後半の唐代に入りて其の佛典を傳來し、彼に在ては將に生氣を失はんとしつゝ、あるの佛種を移して之れを日東の新天地に植え、榮爛たる美花を開かしむるに到れるは、洵に偉觀と云ふべし。而も唐代佛教の特色たる譯經事業の最後を飾るべきは般若三藏にして、是の般若三藏の最後の翻譯たる『大乘本生心地觀經』に、筆受譯語の重任に膺りたるは、殆んど空前にして、而も絶後とも云

ふべき唯一の日本僧たる我が靈仙三藏たりしことを思へば、漢譯佛典の精華を移植して我が日本の地に發育せしむべき中心核實となりつ、過渡の橋梁となりしは、是の靈仙三藏なることを忘るべからず。

抑も『貞元釋教錄』の記する所に依るに、唐代の譯經家は、開國記念の武徳元年(A.D.618)より貞元十六年に到る迄、一百八十三載の間、凡そ四十六人ありと稱す。(縮刷藏經結六ノ六十丁左)然れども是の中に、支那撰述の目錄、音義、集論等の作者を含むが故に、嚴密に譯經家と稱すべき者を數ふる時は二十五名を得べし。而も最も偉大なる人としては玄奘(Hsüen-kwán)三藏の如きあり、其の他、地婆訶羅(Divakara)實叉難陀(Sikshānanda)義淨(Tsing)菩提流支(Bodhiruci)輸波迦羅(Subhakarasiṃha)跋日羅菩提(Vaṅgabodhi)阿目佉跋折羅(Amoghaśāstra)の如き、何れも後代の佛敎に對し多大の貢獻を成せし大家なり。而して其の掉尾の偉人と云ふべき般若三藏

(Pragya)の如きも、單にチストリアン派の景淨と翻譯を共にせりと云ふの外、特種の花嚴經を譯して淨土敎と花嚴との連環を作れるの外、弘法大師に悉曇を傳授せりと云ふの外、『大乘本生心地觀經』の翻譯のみを以て、十分に佛敎界に寄與する所ある大家と稱するを得べし。何となれば、是の『心地觀經』は報恩主義の道德を極説して、後來佛敎徒の道德觀念を一定不變の地に置きたる重要な經典なればなり。

予輩は唐代上半の譯經事業につき、玄奘三藏の脇股僧として新羅僧圓測あり、般若三藏の補佐として我日本僧靈仙のありし事は、支那佛典の翻譯史上極東の二明星として永久に光輝を放つべきものなるを確信す。圓測法師の事蹟は、唐朝宋復の塔銘、(續藏經乙第二十三套第一冊編入)及び新羅朝唯一の能文家たる崔致遠(A.D.885頃)の祭文(『華嚴寺事蹟』)に明なるも、我靈仙三藏の事蹟に至りては、全く隱没して其事實の今日迄顯れざりしは、浩歎に堪へたり。

三 靈仙大德譯經の史料現出

抑も予輩が前來推稱したりし靈仙三藏が般若三藏の譯場に列したりとは、いかなる記録に徴して之を斷言するぞと云ふに、日本より入唐せる八家の一人にして比叡山第二代座主たる慈覺大師圓仁 (A.D.794—864) の『入唐求法巡禮記』に、數次日本國內供奉翻經大德靈仙の名見へ、或は靈仙三藏の名さへありしより、譯場に參せし日本僧として夙に其實實の明にならんことを希望せしが、今夏圖らずも宗教局の寶物調査に際し、友人荻野仲三郎氏が江州石山寺の經藏を探查の際、『大乘本生心地觀經』の古寫斷卷を得、其第一卷に譯場列位を記したるものを發見し共に之を實見したる友人富岡謙藏氏より其の寫しを贈られたり。而して是の譯場列位こそ、予が年來希望したりし靈仙三藏の譯經事實を證すべき唯一の文獻なり。今左に其全文を掲ぐ。

大乘本生心地觀經卷第一

(奥書)

元和五年七月三日内出梵夾、其月廿七日奉詔於長安醴泉寺、至六年三月八日翻譯進上

闍賓國三藏賜紫沙門 般若 宣梵文

醴泉寺日本國沙門 靈仙 筆授並譯語

經行 寺 沙門 令臺 潤文

醴泉 寺 沙門 少誣 迴文

濟法 寺 沙門 藏英 潤文

福壽 寺 沙門 烜濟 迴文

惣持 寺 沙門 大辨 證義

右街都勾當大德莊嚴寺沙門一徹 詳定

都勾當譯經押衙散兵馬使兼正將朝議郎前行隴州

司功參軍上柱國賜緋魚袋臣李朝

給事郎守右補闕雲騎尉襲徐國公臣簾俊奉 勅詳

定

銀青光祿大夫行尚書工部侍郎充 皇太子及諸王

侍讀長洲縣開國男臣歸登奉 勅詳定

朝請太夫守給事中充集賢殿 御書院學士判院事

臣劉伯翥奉 勅詳定

朝議郎守諫議大夫知匭使上柱國賜緋魚袋臣孟簡

奉 勅詳定

右神策軍護軍中尉兼右街功德使扈從特進行右武

衛大將軍知內侍省上柱國刻國公食邑三千戶第五

從直

以上は譯場列位の全文なり。『宋高僧傳』を按ずるに

「筆受者は必ず言は華梵に通じ、學は有空を綜ぶ」と

云ひ、譯語は云ふ迄もなく漢梵並通して梵漢兩國人

の意見を徴する重任に膺れり。『宋傳』に度語、或は

傳語といふものは是にして、地婆訶羅三藏の時には單

陀般若提婆三藏この任に當り、達磨流支三藏の時に

は、婆羅門李無諂、伊舍羅等何れも印度人にして永

く漢地に居住するの人、是の任に當れり。迴文とは

綴文と同義なり。是の迴文、潤文、證義、詳定の任

に當りし六僧の事蹟は、更に史傳に徴すべきものな

し。恐らく其文献を闕きたるものならん。憲宗御製

序に、

於醴泉寺、詔京師義學大德闍賓三藏般若等八

人、翻譯其旨

とあるの文に照せば、茲に列せる大德僧正しく八人

あるに應ぜり。其他參列の大官中、蕭俛は『舊唐書』

列傳百二十二、『新唐書』第二十六卷蕭俛に出で、唐

室と姻親を通ぜしことある名家の子孫に屬し、孟簡

は『舊唐書』列傳第百十三に詳傳あり。其中に、

六年（元和六年A.D.811）詔。與給事中劉伯翥、工

部侍郎歸登、右補闕蕭俛等、同就醴泉佛寺、翻

譯大乘本生心地觀經。簡最擅其理。（『舊唐書』列傳

卷第一百一十三、孟簡傳）

の文ありて、白衣の列位中に在ては、孟簡最も力を

盡せること明白なり。されば御製序中にも特に

命諫議太夫孟簡等四人、潤色其文、列爲八卷、

勒成^二一部^一。

と云へり。

尙ほ是の譯場列位中に、元和五年七月三日、内出梵夾とあるは、之を御製序文に照すに、

大乘本生心地觀經者、釋迦如來於^レ耆闍崛山、與^レ文珠師利、彌勒等諸大菩薩^二之所說也、其梵夾、我烈祖高宗之代、師子國王之所獻也。實^レ之曆年秘^二于中禁、朕嗣守^レ丕業、虔奉^レ昌圖^一（乃至）乃出^二其梵本^一於^レ醴泉寺、詔^レ義學大德闍賓三藏般若等八人^二云々^一

とあるに應じ、是經の梵本は、般若三藏の將來に非ずして、師子國(Sinhala-Ceylon)より獻納せるものなること明かなり。

般若三藏の來朝せし時代に在ては、武后、玄宗等の翻譯全盛時代を去ること、稍遠きに隨ひ、漢人にして梵語に通じ、若くは印度人にして唐語に通ずるもの甚だ稀れにして、譯經事業に大困難を感ぜしこ

とは、『理趣六波羅蜜經』の初譯に當り、梵語の素養なき異教徒の波斯人が胡本を以て之を對照し、漸く漢譯するに至りしが、遂に意味不通暢を以て廢毀するの止むを得ざるに至りし事實は、いかに其の困難なりしかを想像するに餘りありと云ふべく、貞元十二年に『四十華嚴經』を譯せんとするに當り、

頻使^レ催促^レ無^レ譯語人^一、訪^レ知東都有^レ善語者^一、三藏表狀、伏請^レ奏進^一。（『貞元錄』第十七卷、縮藏結七七下左）

と云ふの文に見ば、一の廣濟法師を得て譯語たらしむる迄、いかに其人無さに困しみしかを知るべし。されば其以後十餘年を經過したる元和五年には、『守護國界主陀羅尼經』を共譯せし牟尼室利三藏（『宋傳』に寂默）は業已に元和元年に没し去り、（『宋高僧傳』卷三）前來譯語に當りし人も亦た同じ運命の下に去りしもあるべく、或は生存したる人も遠く去て上都に留るものなく、官民共に探索の結果、遂に隠れた

る碩學、我が靈仙三藏を召聘して此の譯場に列して最大重任を寄托するに至りしならん。若し圓照律師の撰になる『般若三藏續譯圖紀』二卷（『續開元錄卷上、及び同卷下引用）なるもの現存せば、是の間の事情或は闡明せらるべきならんも、惜い哉この書、今存せざるのみならず、『貞元錄』及び『續開元錄』に引用する所、また貞元十六年以後の譯經に及ばず。今日に於て靈仙三藏の事蹟を考ふべきものは、獨り『入唐求法巡禮記』あるのみ。

四 靈仙三藏の事蹟

慈覺大師の『入唐求法巡禮記』は承和五年六月（A. D. 838）より、同十四年九月（A. D. 847）まで約十年の間の旅行中に見聞せし事實を記せしものにて、唐代の佛教狀態を詳記せるのみならず、風俗習慣等の記述として最も詳密正確のものとして珍重せらる。是の中、靈仙三藏に関する記事凡そ四處あり。（國書刊

行會本にては二百十四丁、二百十六丁、二百二十三丁、二百二十五丁）

是の記事に依て之を考ふるに、靈仙三藏は是の譯經事業の終りし後、憲宗の眷遇を得て内供奉の命を受け翻經大德と稱せらるゝに至りしが、般若三藏の信仰せる清涼山五臺の文殊菩薩を篤信し、榮譽の地去て五臺の閑居を望み、元和十五年（五臺巡禮の志願を遂げ、最高峯の下なる金閣寺堅固菩薩院に住すること二年、茲に不惜身命の紀念として手皮を割て佛像を作り、并せて金銅塔一個を作りて是の金閣の寶庫に納入せり。其後遷りて七佛教誠院に住することとなりしが、我が朝淳和の聖天子が、遙かに其の道譽を慕ふて百金の恩賜を贈り玉ひ、勃海僧貞素が之を齎して仙大師に達し、大師は聖恩の無窮に感じ、聊か叡慮に奉答せん爲め、一万粒の舍利、新經（大乘本生心地觀經なるべし）兩部等を進獻し奉り、貞素法師は一諾の義に厚く、遂に之を我が朝廷に達

せり。(惜むらくは『續日本後紀』この時代を亡佚す)

我が朝廷には、如何に是の唯一無二なる國民の手に

なれる經典を叡覽まし／＼けん、史籍佚して之を詳にするに由なきも、天顏の麗はしかりしは之を拜察するに餘りあり。貞素法師は本と身を鴻毛に比して

義を泰山に守るの人、即ち一葉の舟に露命を萬里の波濤に托する危険を凌ぎ、急ぎ歸りて辱なき聖旨の

程を達して、仙大師の苦衷を慰せんと、再び五臺の舊庵を訪へば、山川舊に仍りて改まらざるに、待ち

し仙大師は既に茶毘一片の白骨と化し去りぬ。即ち

不航塵心渡自涓 情因法眼奄幽泉

明朝儻間滄波客 的説遺鞋白足還

の吊詩一篇を壁窟に題して其の英魂を祭りぬ。是れ實に大唐大和二年 (A.D.838) 四月十四日にして我が

朝にては淳和天皇天長五年なりき。されば我が日本の唯一の譯經三藏なる靈仙三藏の示寂は、正に大和

元年の頃なりと云ふべき歟。而も『巡禮記』に

被_レ人藥殺_レ中_レ毒而已過。弟子等埋殯未_レ知_レ何處_一。

とあるを見れば、才識の拔群と兩朝皇家の歸崇とは遂にこの奇禍を召くに至りしものか。嗚呼今を去ること正に一千八十六年、是の記事を読み、是の事實を推想するに、腸爲に九廻するを覺ふ。

因に『續日本後紀』承和九年の條下に、勃海國王大舞震の國書を載せ、百金の贈途中風浪難破の爲め海底に沈み遂に靈仙三藏の手に歸せざることを記す。是れ或は貞素法師が直接に日本より托せられたるの者と別種のものならんか。後考を俟つ。

五 『貞元釋教錄』に於ける

一 疑問

支那に於ける佛典の目錄として最も完美整頓せられたるものは、唐代に編纂せられたる智昇の『開元釋教錄』二十卷 (玄宗皇帝開元十八年進納 A.D.730)

と其後七十年後に再び編製せられたる圓照の『貞元

釋教錄』三十卷(德宗皇帝貞元十六年進納 A. D. 800)

とす。就中、圓照法師の『貞元釋教錄』は、唐代譯經

事業の殆んど完了せられたる頃に編纂せられ、且は

『開元釋教錄』の後を受け其長を取り短を捨て最も精

鍊せられたるものと稱せらる。而も宋、元、明三代

の大藏經に之を收めず。獨り高麗版一切經の中に編

入せられたれば、我が佛敎界には之を珍重し、徳川

氏享保年間之を翻刻して流布せることあり。今こ

の『貞元釋教錄』につきて般若三藏の譯經を見るに、

般若三藏の譯せる殆んど全部を網羅し、六部七十卷

を擧ぐ。(縮刷大藏經結帙第七冊五番右、及七番右)

其目左の如し。

(一) 大乘理趣六波羅蜜多經一部十卷 御製序

(二) 大華嚴長者問佛那羅延力經一卷

(三) 般若波羅蜜多心經一卷

(四) 守護國界主陀羅尼經一部十卷 貞元六年
庚午譯

(五) 本生心地觀經一部八卷 御製序貞元
六年庚午譯

(六) 大方廣佛華嚴經一部四十卷

石六種の中、第六の『大方廣佛華嚴經』は晋代の六十

卷本、及び唐代實叉難陀譯の八十卷本に對し、便宜

上その卷數に依りて『四十華嚴經』と稱す。予輩も前

來の文に數次その名目を使用せり。偕今茲に掲げた

る經目下の細註は、すべて『貞元錄』に加へ置けるも

のにして、是の細註を事實とすれば、第五の『本生

心地觀經』の如きは、貞元六年に於て既に翻譯せら

れ終ることとなりて、前掲石山寺經本に記されたる

元和六年よりも約廿一年前に翻譯成功せる者と云は

ざるべからず。若し果して然りとせば、石山寺經本

の奥書は虚偽にして我が靈仙三藏の事業は消滅し去

るものなり。茲に於て予輩は研究の結果、『貞元釋教

錄』は後人の攙入加筆ありて、貞元十六年圓照法師

進獻の眞本に非ることを確かめ、石山寺經本の奥書

が正確にして靈仙三藏譯經の事實いよく光彩を放

つものなることを知るを得たり。

今この事實を證明せんため、先づ『本生心地觀經』なるものが、徳宗時代(A.D.785—805)に譯せるものに非ることを證明すべし。

第一に有力なる史料は經の御製序なり。是の序は麗宋元の三大藏經には、單に御製とあれど、明代大藏經には唐憲宗皇帝製とあり。たとひ憲宗皇帝の文字なしとするも、序の終りにその年代を明言して

我唐御天下一百九十有四年也

とあり。唐高祖が帝位に即きたる武徳元年の大唐紀元より算して一百九十四年は、即ち憲宗の元和六年(A.D.811)に當り、『舊唐書』の憲宗本紀元和六年春正月朔の條下に、

勅、諫議大夫孟簡、給事中劉伯芻、工部侍郎歸登、

右補闕蕭俛等、於醴泉寺、翻譯大乘本生心地觀

經、(本紀卷十四、是外『舊唐書』孟簡傳の文は前に引用す)

とあるの文と相符し、元和六年に翻譯成功せる事實

は、一點疑ふべきの餘地なし。元代大藏經本には、

每卷首に元和年中般若譯の語さへ安置せり。而もこの梵本が、『理趣六波羅蜜經』の如く般若三藏の將來なるか或は民間の寺院に傳來せるものならば、貞元

六年に一度譯したるものを元和六年に再譯せしかと云ふ疑問もあれど、高宗代に師子國より獻じたるまゝ、歴代之れを實として中禁に秘すと云ふ事、御製序中にあれば、憲宗朝に至るまで嘗て之を外に出さざりし事明白なり。更に徳宗の貞元二十年(A.D.804)

に入唐し、約三年間遊學して歸朝(元和元年 A.D.806)せる空海の『請來錄』を見るに、

新譯華嚴經一部四十卷 六百一十二紙

大乘理趣六波羅蜜經一部十卷 一百六十紙

守護國界主施羅尼經一部十卷

造塔延命功德經一卷

右四部六十一卷般若三藏譯

とありて、更に『本生心地觀經』八卷の目なし。若し

その譯成功し居らば、東方の布教を委任せしほど之を厚遇せし般若三藏が、是の社會教育上大切なる經典を弘法に付屬せざるの理なく、新經請來を目的とせる弘法が之を請來せざるの理なし。各種の方面より觀察して、この『本生心地觀經』八卷の翻譯は、憲宗以前に之れ無かりしことを斷言し得べし。

然らば何故に『貞元釋教錄』が貞元六年譯の細註を施し、而も貞元十六年に進獻せし書目中に、十年も後に翻譯せる是の『本生心地觀經』を編入せしか。是の疑問を解釋する前、般若三藏の翻譯せる六部の經典が成功せる年月(末尾の年)(講參照)を調査せしに、『本生心地觀經』と共に貞元六年に譯せりといふ細註を下せる『守護國界主陀羅尼經』は、其年代を徵すべき史料を缺くと雖も、其の共同翻譯者は牟尼室利三藏なること麗版大藏經本(宋元大藏經に是經を缺く)の卷首に明記せらるゝ所なり。而して牟尼室利三藏の名は『貞元釋教錄』中に見へず、却て『宋高僧傳』(瑞拱元

年A.D.988(唐壽)に傳あり。其傳に依れば、北印度の人にして貞元十六年に長安に入り、同十九年に『守護國界主陀羅尼經』を譯し、元和元年に没すとあり。『宋高僧傳』は其の史料に不備の點と不秩序の點とあれど、記事はすべて相當の材料に依りて之を取れり。されば若し是の『宋高僧傳』の説を眞なりとせば、牟尼室利の名が貞元十六年帝室に進獻せる『貞元錄』に見へざるは、寧ろ至當の事にして、却て『守護國界主陀羅尼經』を其の經目中に收めしことを怪しと云ふべし。

是の如く『貞元錄』中に收めたる第四、第五の兩經が俱に貞元十六年以後に譯せられたるものにして、是の經錄中に編入すべきの理なし。茲に於て疑問の起るは、圓照法師が自身に後日訂正増補せしかといふ事なり。増補と見らるべきの證なきにしもあらず。同じく圓照法師が編述せる『貞元續開元釋教錄』三卷は『貞元釋教錄』の著述六年前、貞元十年に編し

て進獻せし目錄なり。而も貞元十年に進上と卷首に明記しあるに拘らず、その下卷には、貞元十一年及び同十四年の表啓文をも收めたり。尙ほ且つ般若三藏の譯經につきては『貞元釋教錄』と同じく六部七十卷の經目を數へ、同じき細註さへ施せり。尙ほ更に奇なるは、

般若三藏所譯共七十卷都收『貞元藏大錄』

とありて、後の貞元十六年に成りし『貞元釋教錄』(即ち貞元藏大錄)を指し居ることなり。是に由て之を觀れば現流行の圓照法師『續開元錄』三卷なるものは、貞元十年の撰にあらざりして、後年改訂を加へたるものなること明瞭と云ふべし。是の筆法より論ずれば貞元大錄即ち『貞元釋教錄』なるものも、圓照法師が後年改訂を加へたることを推知し得べし。されば貞元十六年の撰とは云へ、其以後に譯せられたる經典迄編入せらるゝことは有り得べきの理なり。

然るに茲にいかにしても調和すべからざる矛盾は

細註の貞元六年に第四、第五の兩經を譯せりと云ふ文なり。(古本に校合せる和刻本亦た是の細註あり)是に就て現任流布の『貞元釋教錄』は何人の手に依りて今日に傳來せしかを調査するに、五代の亂を受けて宋朝には夙に是の目錄を得ざりしこと、その一切經中に之を收めざるを以ても之を知ることが得べく、今日たゞ高麗版の大藏經中に之を見るを得るのみ。和刻本に古本と麗版と校合せる箇所あれど、その古本今存亡を詳にせず、抑も麗版大藏中に之を收め得たるは、之を保大三年(南唐元宗A.D.945)に『續貞元錄』を編成したる恒安法師の勞に歸せざるべからず。恆南法師は、會昌の廢佛(A.D.844)と唐季の戰亂とにて佛典の亡佚を慨き、南船北馬、あらゆる名山大刹を跋渉して佚亡の典籍を収集し、遂に新經目を作りて之を整頓するを得るに至れり。されば其収集の功蹟は千歳その惠を垂ると雖も、強て經錄を増益せる痕迹を留めたるは遺憾なり。彼の『貞元釋教錄』の第一卷に

○千臂千體曼殊室利經十卷 保大中拾 已上十四卷南
天竺國三藏沙門金剛智譯

の一節ありて、明かに保大年中に之を編入せしことを註し、その卷數さへ改めて已上十四卷とせり。是の點より推考すれば、『貞元錄』の細註と云ひ本文と云ひ、圓照法師真撰のまゝに傳はるに非ずして恒安法師の加筆に成ること掩ふべからず。されば今疑問に上りたる『本生心地觀經』の如き、『守護國界主陀羅尼經』の如き、他に適確なる史料ありて翻譯年代の明瞭なるものを、殊更に圓照法師が貞元六年と誤り註するの理なし。況んや圓照法師は般若三藏と親交あり、その譯場にも列したることありて、『般若三藏續譯圖紀』の著述あるに於てをや。彼の第四、第五の譯經下に貞元六年譯の細註あることは、恆安の『續貞元錄』（縮藏結帙第七冊百四番左）亦た同様にて、殊に第五の『本生心地觀經』八卷の下に、德宗皇帝御製の文字さへあるを見れば、恆安法師は、其序

を以て德宗の御製と誤解したることを表白するものにして、隨て貞元六年の細註は、恆安法師の下したるものなりといふ推定を下し得ざるにあらず。たとひ恆安法師の加筆に非ずとするも、圓照法師の自註に非ずして後人の誤推に依りて加筆せられたるものなることは明々白々の事實なりと斷定するを得べし。予輩は圖らずも石山寺經本の現出に依り、我が靈仙三藏が日本人として支那の譯場に參したる唯一の人なることを知ると共に、『貞元釋教錄』中に後人の加筆攪入ある事實をも確かめ得たり。

終に臨み『大乘本生心地觀經』（*Mañjyāna-nidāga* *sa-triśayabhinidhāna-sūtra*）の性質に就て「言せば、是の經一部八卷、章を分つこと十三、序品に始まりて囑累品に終ること他經と同型なれど、序品の次に報恩品ありて、四恩を説明し、父母恩、國王恩、衆生恩、三寶恩を詳説して報恩主義の道德を鼓吹せることは、是經の特色と云ふべく、我が貞觀四年

(A.D.863) に正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫
伴宿禰善男が上奏して宅を捨てて寺を建んとせし時、

同 年

問佛那羅延力經 一紙餘

▲奉勅從 四月十九日 至十一月

是經の順序に依て四恩を説き、其の寺を報恩寺と名

十五日 一再譯 六波羅蜜經 十卷

けしこと(『三代實錄』卷六)あるを見れば、是經が早

光宅寺沙門利言譯語

く我國民に愛讀せられて其の主張が一般の人心を感

同 五年

▲二月四日譯 六波羅蜜經中真言

化せることを推想すべし。其教義より云へば天台の

契印法門 唐梵相對畢

所謂方等部に屬せられ、維摩、楞伽の諸經と其の説

同 六年

▲譯 般若心經 畢 (八月十一日)

を一にすれども、彌勒往生を勸説せることは、亦た

同 年

▲七月廿五日勅賜 三藏名號 及紫

一特色として認むることを得べし。今參考の爲め、

袈裟

般若三藏の略年譜を掲げ、前説の足らざるを補ふ。

同 年

▲七月十五日受 使 北天竺 命 廿

(▲印あるはずべて圓照の『續開元錄』及び『貞元錄』

四日進發、廿七日發 長樂驛時

の記事に依る)

五十七歲

建中二年

▲廣州漂着

同 八年

▲二月歸 于太原

貞元二年

▲入京見 從兄羅好心

同 十年

▲三月發趨至 秋首 巡 禮 五臺山

同 年(?)

▲與 波斯僧景淨 譯 六波羅蜜經、

同 十一年

▲四月還 上都

勅不許 流行

同 年

同 年

▲十一月十八日南天竺烏茶國(○)

同 四年

▲二月十四日譯 佛說大華嚴長者

同 年

進 梵經兩夾

同十二年

▲奉勅從六月四日始譯烏茶所進四十華嚴經、天官寺沙門廣濟譯語

同十四年

▲二月廿四日華嚴經空卷譯畢進上

同十九年

共牟尼室利三藏譯守護國界主陀羅尼經十卷、沙門智真譯語
〔宋高僧傳〕卷三)

元和元年

授所譯經四部六十一卷及梵夾三口于日本僧空海。〔大師請來錄〕)

同五年

七月三日奉勅始譯大乘本生心地觀經、日本國沙門靈仙譯語(石山寺古經跋)

同六年

三月八日心地觀經十卷譯成進上賜御製序(同上經跋、及び舊唐書『御製序』)

(大正二年九月廿一日稿了)

ユール氏注マルコ・ポーロ

紀行補正二則

藤田豊八

一 Kinsay は京師の對音に非ず

Marco Polo 紀行の Suju の蘇州にして、その Kinsay の杭州なるは、固より疑ふべき餘地あるなし。たゞ Kinsay が何の對音なるやに至りては、Suju の蘇州に於けるが如く、しかく明ならず。予は之を以て京師(南宋)の對音なりとせる Yule 等諸氏の所説に異議なき能はざる者なり。

Polo は Suju に地の義あり、Kinsay に天の義ありとすへり。Odonic また Kinsay に天の城の義ありとし、Wasaki にもまた此城につきて、天堂及び天に關する曖昧なる叙述あるも、こは支那の諺語に天有